Japan Society of Obstetrics and Gynecology

25 子宮頸癌における血清ICAM-1値

大分医大
奈須家栄，江藤靖子，河野康志，廣田佳子，
早田　隆，宮川勇生

［目的］癌の浸潤や転移には種々の細胞接着分子が関与していることが知られている．ICAM-1（CD54）は細胞接着分子の１つで，LFA-1 をリガンドとして働き，種々の細胞で発現が認められる膜蛋白である．近年，可溶性ICAM-1の存在が確認され悪性黒色腫や腎細胞癌など様々な悪性腫瘍の進展に伴って血清ICAM-1値が上昇することが報告されている．

今回，我々は子宮頸癌における血清ICAM-1値を測定し，その意義について考察した．

［方法］対照の正常女性16例および子宮頸癌34例（０期９例，Ⅰ期７例，Ⅱ期３例，Ⅲ期５例，Ⅳ期３例，再発７例）を対象とした．初発癌では初回治療前に，再発癌では初回治療後に再発が確認された時点で採血を行い，血清を分離して測定まで -80℃にて保存した．血清ICAM-1値の測定はICAM-1 test kit(CELL FREE,T Cell Diagnostics, Cambridge,MA) を用いて ELISA法により行った．

［成績］対照群の血清ICAM-1値は 294±84ng/ml，また，子宮頸癌の血清ICAM-1値は０期:274±39ng/ml，Ⅰ期:339±136ng/ml，Ⅱ期:554±131ng/ml，Ⅲ期:498±155ng/ml，Ⅳ期:451±108ng/ml，再発:503±111ng/mlであった．初期癌では血清ICAM-1値の上昇は認められなかったが，癌の進行や再発に伴い血清ICAM-1値は有意に上昇していた．

［結論］これまでに子宮頸癌と血清ICAM-1値について検討した報告はない．本研究成績より悪性黒色腫や腎細胞癌と同様に子宮頸癌においても癌の進展，再発に伴って血清ICAM-1値が上昇することが明らかとなった．また，可溶性ICAM-1が子宮頸癌の進行に関与していることが示唆された．

26 子宮頸部悪性腺腫の補助診断法、とくに粘液中のシダ状結晶とMPA負荷試験について

北海道対癌協会細胞診センター
沓沢　武

【目的】子宮頸部悪性腺腫では粘液性帯下の増量を伴い、頸部に多嚢胞形態と構造異形を呈する。われわれは、この粘液増量でシダ状結晶（FLP）陽性が観られるのを偶然確かめている。そこで本症の補助診断に有用かについて検討した。【方法】粘液性帯下を主訴とした50～59歳の４例について、細胞診、画像診断と共にdry smearにてFLPを鏡検した。また３例ではMPA投与による反応性を検討し、術後の病理組織像やCEA，CA19－９染色と対比した。【成績】1）FLP陽性は４例とも観察された。３例（54歳；閉経50歳，59歳；同54歳，50歳；未閉経）の血中E_2は20,＜10，124pg／ml,また後者２例ではMPA2000mg投与後も陽性が持続してみられ、粘液増量とFLP陽性は血中E_2とは無関係と推測された。2）HSGで頸部に特異なpooling像や経腟エコーでpolycysticな画像を認めた。この３例では画像に一致する大小様々の嚢胞形態（深さ10～12mm）が頸部のほぼ全周でみられ、CEA（＋），CA19-9（+++）また小腺管の多発を呈し悪性腺腫と見做された。3）他の未閉経の50歳例では類似のエコー像がみられ、一方粘液増量でのFLP陽性はMPA5600mg投与で陰性化した。この例は頸部の約半周で深さ9mmの多嚢胞形態と小腺管の多発を呈したが、内子宮口を越えた波及はなく、またCEA(-),CA19-9（++）で良性の病態と考えられた。4）これらに共通の細胞所見は核密度の高い腺集団や異形性の乏しい円形配列（約50μ）などであった。【結論】粘液中のシダ状結晶を頸管腺の腫瘍性病変との関係からはじめて捉えた。細胞診、画像診断の他に粘液中のFLP形成能がgestagenで阻止されなければ、その増量はestrogen非依存性を強く示唆し、補助診断に有効と思われた。

NII-Electronic Library Service